(4/14 瀬嵩の県民大会)

朝日新聞 2024年(令和6年)4月10日(水) 第3種郵便物認可

「沖縄」を考える 代執行

辺野古工事 誰に利が

作家 池澤夏樹さん(78)

いけざわ・なつき 北海道生まれ。『スティル・ライフ』で芥川賞。15年にわたり同賞選考委員。ギリシャや沖縄、フランスで暮らし、現在は長野県在住。小説、紀行、翻訳多数。

いま見ておかなくてはいけない。そんな思いから8年ぶりに辺野古に行きました。国が沖縄県知事の権限を奪う代執行によって、新たに埋め立て工事を始めてから1カ月後のことです。

その日は雨でした。

基地建設に反対し座り込みをする人たちを、機動隊員が排除していく。そこに1台、また1台とトラックがゲートの中に入っていく。その様子を見ながら、いったい誰に利があるのかと考えました。

完成まで12年かかるというが、軟弱地盤対策の難工事によって工期はさらに遅れるかもしれない。総工費は3500億円ほどから1兆円近くになったが、もっと膨らむのではないか。完成のころには、今工事を進めている政治家や官僚は引退し、だれも責任をとることはない。そもそも完成するかも疑わしい、と私は見ています。

もうかる人は少なくともいる。工事を請け負う大手ゼネコンやマリコン(海洋土木会社)には金が入る。めぐり巡って利を得る人がいる。

普天間飛行場を東京に持ってきてごらん。滑走路の長さ約2700㍍は、JR中野駅から阿佐ケ谷駅までの距離。中野区や杉並区で、住宅街や学校の上空をヘリが飛んだらどうか。

私はそんな風にして、ことあるごとに本土を挑発してきました。飛行場と隣り合う普天間第二小学校では現に、着陸する米軍機のパイロットの横顔が子どもたちから見えるからです。しかし、本土は応えなかった。

2001年の米国同時多発テロのときには「米軍基地が攻撃されるのでは」と、沖縄への修学旅行のキャンセルが相次いだ。でも、沖縄にも予どもたちがいることは話題にものぼらず、気づいていないに等しかった。

明治政府が琉球王国を併合した琉球処分、日本本土を守るための「捨て石」とした沖縄戦、日本の独立と同時に切り離した米軍統治。そうした歴史を経てなお、沖縄の日本復帰から半世紀が過ぎて、国土の0・6%に、国内の米軍専用施設の7割を集中させている。

どんな迷惑施設を押しつけてもかまわない。基地に慣れているから。沖縄だから――。沖縄に対しては普通の人たちが平気でムチャクチャな考え方をする。日本本土の人たちには「沖縄=2級の国土」という意識があると言わざるをえません。

かつては自民党の政治家にも、歴史への負い目があり、沖縄とことこん向き合いました。今は全く知らない、知ろうともしない世代が台頭しています。

私は1994年から約10年間沖縄に住みました。「帰りそびれた観光客」であり、「勝手に特派員」となって、本土の人たちが知らない沖縄を伝えてきた。沖縄がかわいそうだからでも、沖縄のためでもない。弱者に負担を押しつけて、強者が利を得て、平然としている。そんな日本という国がみっともないからです。

30年、沖縄を発信してきて、僕はこのままでは終われない。これまではインタビュアーやウォッチャーだったけれど、抽象論を書いても変わらないならばと今回は、辺野古に行った。次のアクションは何か。それが、工事車両が行き交うキャンプ・シュワブのゲート前に座り込むということなら、初めて座ってみようとも思っています。

(聞き手・上地一姫)

警備員が並ぶ米軍キャンプ・シュワブのゲート前で、抗議の声を上げる人たち(左)=9日午前9時18分、棚橋咲月撮影

完成に12年・1兆円 もっと増えるのでは

弱者に負担押しつけ平然 みっともない

! 前例なき「代執行」による米軍基地建設が続いている。防衛力強化が加速している。日米が普天間飛行場の返還に合意して12日で28年。「沖縄」を考えたい。(隔週掲載します)

2024年(令和6年) 4月24日 水曜日 沖縄タイムス

新基地反対 行動で示す

戦争への流れ 止める思い

作家の池澤夏樹さん(78)が11日、新基地建設が進む名護市辺野古を訪れ、抗議活動に参加した。現場で見て感じたことを寄稿してもらった。

「海を埋めないで下さい」と書いた手製のプラカードを新基地工事車両に掲げる池澤夏樹さん(写真はいずれも阿部岳撮影)=11日、名護市辺野古

辺野古に坐る 池澤夏樹

身体がすっと持ち上げられた。

二人の男性が右と左からぼくの脇の下に手を入れ、もう一人が両足を持って引き上げる。そのまま十メートルほど水平移動してそこに下ろされ立たされる。

長い人生で自力以外の方法で移動したのはたしか十数年前の脊椎の手術の時以来だ。あの時はストレッチャーで運ばれた。その外は七十数年間すべての道を自分の足で歩いてきた。

今回も自分で動いて下さいとは言われたのだ。しかしぼくはそれを断った。その結果、運ばれることになった。特に抵抗はしなかった。そうしていたら公務執行妨害罪に問われただろうか? 濃紺の制服を着た三人の男性は沖縄県警の機動隊員だった。

そこに坐っているぼくと仲間たちに背後から何度も「危険ですのでそこを移動して下さい」とハンドマイクの声が言っていた。しかしそこは日当たりのよい平坦な場所で、天気もよく、特に危険なようには思えなかった。

彼らがしようとしていることがぼくたちに危険を及ぼす可能性はあった。大型トラックを通そうとしていたのだ。

しかしそこは公道であり、高速道路のように車両専用とされていたわけではなく、歩行者が自由に通れるところだった。まあぼくたちが坐っていたとしても。

大型トラックを通したくない。ぼくが手にしたプラカードには「海を埋めないで下さい」と書いてあった。同行者のためのもう一本には「山を削らないで下さい」とあった。木工の腕

■ ■

その二時間ほど前、ぼくは舟に乗っていた。辺野古漁港から出て大浦湾の埋め立て工事の区域を海の側から見る。オレンジ色の円筒状のフロートが護岸に沿って長く何キロも設置され、現場への接近を阻んでいる。ぼくが乗った抗議船「平和丸」は普通の小さな漁船で特別な装備はない。

船長の中原貴久子さんが目の前で行われている工事について、反対運動の現状について、海上保安庁などの妨害に法的根拠がないことについて、さらにはジュゴンの生態から大浦湾の生物多様性について、珊瑚が地形を造ってきたことについて、地球の歴史について、緻密に解説をしてくれる。すごい勉強ぶりだと感心した。

目的地は湾のずっと先、去年十二月の代執行によって工事が可能になった石材投入の現場である。実際にはフロートの外から通過するだけだが、たしかにそこにはそのための青い台船がいる。

途中で「平和丸」にカヌー隊が合流した。一人乗りのカヌーが合流した。一人乗りのカヌーとフロートを乗り越えて内部の水面に入り、海上保安庁のゴムボート隊に囲まれて最終的には身柄を拘束された。

ここでも行動の目的は陸上と同じで埋立工事を阻止すること、具体的には土砂を搬入する運搬船の進入を止めることだ。たまたまこの日は運搬船は来なかったのだが。

■ ■

二月にぼくは何年かぶりに辺野古を訪れてレポートを書いた。その後で考えて二度目は見て書くだけでなく参加することにした。

辺野古の海を埋め立てて新しい基地を造ることに反対する。なぜならばそれは戦争を誘発することだから。敵の攻撃を防ぐと言って武器や基地を用意するのは裏を返せば挑発である。お互いにそうやってゆくうちに事態は悪化して本当の戦争になりかねない。

中原さんの話によると辺野古の基地はただの普天間基地の代替ではない。大きな弾薬庫があり、更には爆弾とミサイルを航空機に搭載する施設がある。そんなものは普天間にはない。つまり代替を理由にした基地機能の強化だ。

この計画ぜんたいに多くのすり替えの論法が使われている。それを論破しようとしても相手は聞かない。裁判所も耳を塞ぐ。遠い人たちが無視する。

国という怪物が戦争の方へずるずると行こうとしている時に後ろ足にしがみついて止めようとする。それを個人たちが、持続的に、自分の意思で行う。それが七千余日に亘って続けられてきた。

この日、珍しくよいニュースがあった。陸上自衛隊がうるま市に造ろうとしていた訓練場の計画を撤回すると発表したのだ。住宅地の真ん中にいくらなんでも無理だと判断したらしい。

国がこういう判断をしたのはかつてないことだった。市民の声、住民の声が功を奏した。この流れが定着することをぼくは期待している。

中原貴久子さん(後ろ)の案内で辺野古沖から新基地建設現場を見る池澤夏樹さん=11日、名護市